

俳句と漢俳の交流

—その現状と展望—

朱 實

はじめに

- I 俳句・漢俳交流の経緯と現状
- II 漢俳と俳句を架橋する
 - 1 漢俳とその翻訳句
 - 2 俳句の漢訳とその問題点
- III 今後の展望

はじめに

1993 年 4 月、本学に赴任して早や 7 年。

中国語・漢詩鑑賞を講義し、漢詩漫遊を楽しんだ。そして、俳句・漢俳の交流促進と、両者の比較研究を行って来た。

俳句と漢俳を通しての日中文化交流は長年にわたり、かなりの成果をあげている。

中国における俳句の受容、俳句の中国文学への影響は、その他諸外国の場合と根本的に異なるところがあるように思われる。もともと俳句そのものが中国文学・漢詩と密接なかかわりがあるからであろう。ところが今日では、俳句が「漢俳」として中国に逆輸入されている。これは、中国文学を父とし、日本文学を母とした俳諧の、「漢俳」という形態での「里帰り」現象であるといえよう¹⁾。

本学在任中に、筆者は漢詩・俳句・漢俳のかかわり、漢俳の由来とその形態および俳句と漢俳との交流に不可欠な俳句の漢訳・漢俳の和訳、更には中国における子供漢俳などについて研究成果を発表した。

本稿では「俳句と漢俳の交流——その現状と展望——」と題し、実作例を引用しながら論述してみたい。

I 俳句・漢俳交流の経緯と現状

漢字で作る俳句“漢俳”は、20年前に誕生した。欧米の HAIKU に比べ、もっとも日本の俳句に近い短詩型であろう。

看 尽 杜 鵑 花
不 因 隔 海 怨 天 涯
東 西 都 是 家

(趙樸初「鑑真大師の奈良に返るを送る」。・は脚韻)

まず漢字の数に注意していただきたい。五七五になっている。これが漢詩と俳句の形式を兼ね備えた漢詩式俳句——漢俳である。

「鑑真大師の奈良に返るを送る」と題して中国仏教協会会長・中日友好協会副会長の趙樸初氏が1980(昭和55)年5月に発表した漢俳で、芭蕉が唐招提寺で鑑真和上の像を拝した句「青葉して御目の零拭はばや」を念頭において作られた、とのことである。

周知のように鑑真は揚州・大明寺ようしゅう だいめいじの高僧で、招きに応じて日本渡航を志すが、その道のりは困難を極め、5度目の難破の際、目が見えなくなってしまう。67歳の時にやっと渡航に成功し、仏教の戒律を伝授する一方、医薬・建築・工芸・書道など唐文化を伝えた。

同年4月、唐招提寺の森本孝順老師が重要文化財である乾漆製の鑑真座像を捧持して揚州に「里帰り」させた。その座像が奈良に帰るのを送る句で、最初に出現した漢俳である。

日本語に直訳すると、

みつく つつじ
看尽せり杜鵑の花
海を隔て天涯なるを怨むに^{うら}あらず
東も西もみな家なり

俳句風に訳せば、次のようになろうか。

つつじ野や海の東西みな我が家

鑑真の心眼がひさびさのふるさとのつつじに見惚れている趣が第一行の五字、次にそれを承けてふたたび奈良にもどり、はるか海を隔てた異郷日本に住む身を嘆くにはおよばないと詠ったのが、第二行の七字である。結びの五字は、東（日本）も西（中国）も鑑真にとってはみな我が家だと言い切っている。「都」はすべての意。傍点をつけた花・涯・家が脚韻。杜鵑花は春の季語。

趙樸初氏の上述の句が漢俳第一号とされているが、同年5月末、中日友好協会の招きに応じて社団法人俳人協会第一回訪中団（会員以外の俳句関係者も含め）一行21名が、大野林火氏を団長として訪中した。その座談会・歓迎宴で趙樸初・林林諸氏が漢俳を披露。その後「人民文学」「人民日報」に漢俳作品が発表され、これを契機に、全国の新聞・雑誌に漢俳作品が掲載されるようになったのである。

ここ20年来、日本の俳人の中国訪問があいつぎ、年を追って、俳句と漢俳の交流が盛んになり、俳句の研究や翻訳は盛況をきわめ、俳句が中国で脚光を浴びるようになった。

その波及効果は子供にまでおよび、1990（平成2）年から、中国の子供の

漢俳が日航財団主催の「世界ハイクコンテスト」などにあらわれるようになった。

もともと和歌や俳諧は、簡潔な漢詩の表現に影響された点が少なくない。ところが今日では、漢詩的俳句として逆輸入されているのである。

1981（昭和56）年8月8日付『人民日報』に発表された「漢俳試作」編集者付記によると、「漢俳は日本の俳句の十七音（五七五）の形成を参照し、脚韻をつけた三行十七字の詩で、絶句・小令あるいは民歌に似ている。……それは短くて洗練され……写実と抒情に適し……吟じても朗読してもよい」とある。つまり、「五七五」三行の有季定型で、脚韻を踏むのが漢俳の形態の特徴と言えよう。

もう少し実作例を挙げて説明しよう。

花色満天春
但願剪来一片雲
裁作錦衣裙

（林林「桜を詠ず」）

花の色 空いっぱいひろがる春
せめて花雲の一片をきりとって
錦の衣裳に仕立てたや

（訳・瞿麦）

1981（昭和56）年4月、京都平安神宮における日中競詠の際の漢俳作品である。春・雲・裙チュン ユン チュウンが脚韻を踏み、桜が春の季語である。

もう一つ上海の子供漢俳を紹介しよう。

雲児片連片
小狗小猫花様変
張張滑稽臉

（周佳奕・小3・10歳）

雲の峰

小犬に変わったたり小猫に変わったたり

どれも滑稽な顔してる

（訳・瞿麦）

夏の雲の変化を、子供の目で捉えたユニークな作品で、俳諧味に富んでいる。片・^{ピエン}変・^{ベン}臉が脚韻を踏んで、雲児が夏の季語である。

ちなみに漢詩の（五言・七言）絶句は、「起承転結」の四行詩だが、漢俳は第一行が「起」、第二行が「承」、第三行が「転」と「結」を兼ねるので、決定的な役割を果たしている²⁾。

II 漢俳と俳句を架橋する

1 漢俳とその翻訳句

漢俳は漢字五七五の三行詩で、脚韻を踏み、季感は俳句の季語と相通じるものがある。

春夏秋冬の四季の漢俳を各三句ずつ選び、読み下しは筆者が訳し、俳句訳はそれぞれ訳者名を付した。最後の二句は、10代（当時）の子供漢俳である。

〔春〕

春遊 林林
勸酒有黄鸝
桜蕊迎人百万枝
能無一句情

春遊
酒を^{うぐひす}勧むるに黄鸝あり
桜蕊人を迎ひて百万枝
一句の情なかるべきや

詩人迎ひて爛漫の花の宴（訳・長田等）

春 江 瞿 麦
天 地 何 悠 悠
滔 滔 春 江 向 東 流
今 古 各 千 秋

あめつちの今滔々と春大河 (訳・山田みづえ)

春 江
天 地 何 ぞ 悠 々 たる
滔 滔 たる 春 江 東 に 流 る
古 今 各 々 千 秋 あり

和 瞿 麦 氏 李 芒
雲 路 何 悠 悠
子 規 高 唱 对 清 流
芳 草 各 千 秋

雲も春子規の唱ひし川も草も (訳・山田みづえ)

瞿 麦 氏 に 和 す
雲 路 何 ぞ 悠 々 たる
子 規 高 く 唱 ひ て 清 流 に 対 す
芳 草 各 々 千 秋 あり

〔夏〕

夜 渡 太 湖 冰 夫
帆 牽 艷 霞 隠
一 夜 浪 敲 幾 回 醒
帰 夢 飛 流 螢

夜もすがら浪音しげく螢飛ぶ (訳・瞿麦)

夜 太 湖 を 渡 る
帆 を 牽 き て 艷 霞 隠 る
一 夜 波 打 ち 幾 度 も 目 覚 む
帰 夢 に 螢 と ぶ

夏 夢 孔 柔
夏 夢 繞 林 泉
朦 朧 雅 趣 弄 蓮 船
醒 罷 聴 鳴 蟬

熟寝より覚めて朦朧蟬しぐれ (訳・長田 等)

夏 夢
夏 夢 林 泉 を 繞 り
朦 朧 たる 雅 趣 蓮 船 を 弄 ぶ
醒 め て 鳴 蟬 を 聞 く

蜘 蛛 網 朱 海 慶
雨 洗 心 如 鏡

蜘 蛛 の 罫
雨 に 洗 わ れ し 心 鏡 の 如 し

蜘蛛網開一面窗	蜘蛛の囀 <small>あ</small> は開く 一面の窓
飛蛾覓涼爽	飛蛾 涼爽 <small>もと</small> を覓む

蜘蛛の囀にとらへられたる雨の粒 (訳・瞿麦)

[秋]

志摩海辺旅情 袁鷹	志摩海岸旅情
海上月遅遅	海上の月 遅々として
波影霞光惹夢思	波影 霞光 夢の思 <small>ひ</small> い惹く
清宵共此時	清き宵 此の時を共にせん

出ても見む月のいざよふ志摩の浜 (訳・瞿麦)

嵯峨野賞月 林岫	嵯峨野賞月
天如水一湾	天 水の一湾に似
月似扁舟泛水間	月 水に浮く扁舟の如し
待逐好風還	よき風を待ちて <small>かへ</small> 還らん

風を待つ舟のごとくに天の月 (訳・牧石剛明)

清齋 趙樸初	精進料理
席地試清齋	席につきて精進料理
松有茸兮海有苔	松茸あるかな海苔 <small>のり</small> もあり
賓主盡無猜	賓主 ことごとく <small>うたがひ</small> 猜無し

松茸に海苔をも添へて馳走の座 (訳・瞿麦)

[冬]

江南難得有雪 王辛笛	江南にめづらしく雪
弥望一片雪	見渡すかぎりの銀世界
可喜江南難得雪	江南にめづらしく雪ふりぬ

把酒賞紅梅

酒酌^くみて紅梅^め賞でん

めづらしく江南に雪いざ酌まん (訳・瞿麦)

炉中白薯

孫揚 (10歳)

炉の中のお芋

炉火紅彤彤

炉の火は赤々と

炉中白薯香味濃

お芋の焼けるいい香り

門前大雪涌

家の外は雪こんこ

雪こんこお芋の焼けるいい香り (訳・瞿麦)

窗花 蕭宏 / 蕭亮 (双子の姉妹 11歳)

雪の花

北風呼啦啦

北風びゅうびゅう

昨夜神仙到我家

昨夜神仙が家に来て

呵氣画窗花

息吐いたら窓に雪の花

神仙の息^{いきふ}吹きかけて雪の花 (訳・瞿麦)³⁾

以上の実作例からもわかるように、漢俳を俳句に翻訳すること、又その逆に俳句を漢訳することは、何れも至難の業である。俳句の視点から漢俳を見れば、往々にして情景叙述の部分が多く、省略が不十分で、くどい感じがするようである。逆に、漢俳の視点から俳句を見れば、省略し過ぎて、理解しにくいようである。それゆえ、俳句と漢俳の交流によって、お互いに相手側の特徴を知り、長所を取り入れ、短所を補い、ともに発展をめざすべきではなからうか。

2 俳句の漢訳とその問題点

俳句の漢訳は大変難しい課題である。

それは俳句は十七音節の詩であるのに対し、漢俳は十七文字 (漢字) の詩

である、ということである。すなわち、漢俳を音で数えると、三十音前後となることが多く、英語の十七シラブルの HAIKU 同様、情報過多になりがちである。

したがって、俳句を漢訳すると、三・四・三文字ぐらいになる。

例えば、

“古池や蛙飛びこむ水のおと 芭蕉”

は、

“古 池 塘

青 蛙 入 水

発 清 響 （訳・李芒）”

となるが、中国人にとっては、このような短い詩は、何となく落ち着きが悪く、詩情に欠けていると思われがちである。

その昔、日本人の先祖は、中国から文字を輸入して、漢字の一字ごとに日本語の音を当てはめて、万葉仮名を発明し、その漢字を分解して片仮名や平仮名を創り出した経緯からも、このような矛盾は運命的なものである。

例えば万葉集の持統天皇の有名な短歌、

はるすぎて なつきたるらし
 “春過而 夏来良之
しろたえの ころもほしたり あめのかぐやま
 白妙能 衣乾有 天之香来山”

は万葉仮名では三・四・三・三・五文字となっており、前記の李芒氏の訳と似ている⁴⁾。

俳句を五・七・五文字の漢俳式に訳すと、

“悠々古池畔 寂寞蛙児跳下岸 水声軽如幻”

（悠々たる古池のほとり、ものさびしい蛙岸よりとびおり、水の音
 軽くて幻の如し）

十七文字をそろえるため、原句以外に「悠々」、「畔」、「寂寞」、「岸」、「軽如幻」と計九文字加えたことがわかる。とりわけ、「寂寞」と「軽如幻」は、訳者が気ままに付け加えたようでさえある。このような原作を離れた“再創

作”は良くない典型である。

一般的に長短句——“一長一短”，あるいは“一短一長”，もしくは“二句五言”，“二句七言”という表現法が，より良く原句の状態を表現することができるように思われる。

総じて言えば，俳句は独自の特徴があり，漢俳は俳句の十七音三節の影響を受けているものの，俳句と異なるものである。李芒氏は，俳句の漢訳は最大限，忠実に原句を再現することを原則とすべきであり，「漢俳訳」と違うと主張しているが，筆者も同感である⁵⁾。

Ⅲ 今後の展望

俳句の国際化に伴って俳句と漢俳の交流ならびにその比較研究は益々深まり発展するものと思われるが，そのために次のことに留意すべきであると考える。

第一に，漢俳の質と量を高め，芸術性を高めること。

日本の古典俳人は漢文学のレベルが高く，それを理論と創作に活用した。例えば芭蕉は“虚栗”跋で「李杜が心酒をなめて，寒山が法粥を啜る」ことを提起し，蕪村の絶命句は「冬鶯むかし王維が垣根か奈」と詠み，一茶は「悠然として南山を見る蛙かな」と詠んで蛙に託して陶淵明を偲んでいる。

近代においてもその伝統が受け継がれ，松崎鉄之介，鷹羽狩行，有馬朗人，松本澄江諸氏の作品には漢籍，漢詩をイメージしたものが多く，その造詣の深さは敬服に値する。

中国の漢俳人も俳句に関する学習を深め，「漢魂和才」の精神で，漢俳のテーマの多様化，用語の活性化に努めるべきであろう。

第二に，季節感に留意し，季語をもっと理解するように努めること。

漢俳にも季節感・季語が使用されるが，漢詩の伝統によって，俳句の視点

から見れば“季重なり”が多く見られる。

第三に、漢俳人口をもっと増やし、後継者の養成に留意すること。

日航財団の「世界こども俳句コンテスト」は中国のこども漢俳の普及と発展に大きく寄与したが、北京・上海以外に青島・大連等の地区でも漢俳作品の募集が始まったと聞く。喜ばしい限りである。

〔註〕

- 1) 山下一海：『俳句への招待——十七音の世界に遊ぶ——』（小学館・1998）
- 2) 瞿麦：「漢俳はいま……」（『俳句あるふあ No.19 特集・俳句を詠む』1996）
- 3) 瞿麦：「漢俳とその翻訳句」（『シリーズ俳句世界4・歳時記の宇宙』1997）
- 4) 李芒：「俳句・漢俳・漢訳」（1996.9. 俳句・漢俳交流会論文）
- 5) 内田園生：「鑑真像の里帰りから生まれた漢俳」（『世界週報』2000年3月14日号）